

室町期歌会資料集成稿―積文と略解題―(一)

石澤一志・酒井茂幸
武井和人・日高愛子
山本啓介

【緒言】

小論は、多くが未刊・未整理のまま残されてゐる室町期歌会資料（及びそれに関連するもの）を、広く学界に紹介することを意図とした。

今回の小論では、宮内庁書陵部図書寮文庫に所蔵される以下の歌会資料七点を選び、積文を掲げ、併せて略解題も付した。

- ① 三条西家着到百首和歌（五〇三―二五三）
- ② 伏見宮家五十首和歌 明応五・一〇（伏―一七）
- ③ 続三十首和歌 大永元・一一（伏―二四）
- ④ 伏見宮家続百首和歌 大永三・五（伏―二五）
- ⑤ 三十三首釈和歌（伏―五三三）
- ⑥ 伏見宮家百首和歌 冬恋雜（伏―五四五）
- ⑦ 点取和歌伏見識（伏―五七九）

ただし、①の実隆詠・実枝詠は、『雪玉集』『三光院詠』に見える（略解題参照）。また、⑥・⑦は、『新編私家集大成』に収められる「貞敦親王」の底本である図書寮文庫蔵『貞敦親王御詠』（伏―一八〇、正徳六年写）の原本と位置付けられてゐるものである（同解題）。従つて、既に『新編

私家集大成』などに本文が既存ではあるが、原本から積文を再度作成する意義は十分に存すると考へた。以て諒とせられたい。

略解題末尾に当該歌会資料の積文・略解題の礎稿作成者を（ ）に入れて示した。ただし内容に関しては、著者相互に検討してゐる。

積文作成にあたり、以下の方針に従つた。

- (1) 漢字は原則として通行の字体に統一した。
- (2) 丁移りを、「一・」一一の如く示した（ただし、今回の小論に所掲した①⑦はすべて卷子本なので、この記載は存しない）。
- (3) 上句と下句の間に、一字分空白を設けた。
- (4) 評語等の小字は、「」に入れてこれを示した場合がある。

各底本の書誌は、略解題を参照されたい。

小論は、平成二七年度・日本学術振興会・科学研究費補助金・基盤研究（C）「室町後期歌会資料の総合的研究」（課題番号〓二六三七〇二〇〇、研究代表者〓武井）による研究成果の一部を含む。

（武井和人）

1 三条西家着到百首和歌

〔宮内庁書陵部図書寮文庫蔵本（五〇三・二五三）〕

十一日 春氷

梅か枝の影うつす水のうす氷 はやうちとけよ花の下ひも 公条

音たてゝうち出る浪や山川の こほりをくたく春の初風 実世

池水のこほりなかるゝ春風に 岩まの落葉色に出つゝ 堯空

十二日 若草

もえ出る草のみとりにふる雨の ちりもくもらぬ庭の春風 公条

朝またき野辺は霞のひまみえて ひとり色こき草のむらく 実世

あさみとり染いたす野への初しほは 秋の花をもまたしとそみる 堯空

十三日 賭射

雲のうへや春のはしめの梓弓 めまちの月に出るもろ人 堯空

あつさ弓はるのまと（^兼ひる）を雲の上の けふのとも声のひゝきにぞ聞 実世

梓弓けふはひく手も舞の手も ひとりみきにそあかすくれぬる 公条

十四日 野遊

うへをきしかきねの梅の花もあれと けふもや野への春にくらさん 実世

へたて行跡のかすみにかへるさも いとゝわするゝ野への色かな 公条

それとなき花さく草にとふ蝶の 心もおなし野へにくらしつ 堯空

十五日 雉

はかなしや子を思ふやみに立雉の 霞のうちにまよふ心は 実世

たつきしの羽かひも春の錦とや 柳桜の色にみゆらん 公条

逢事やかた野のきゝす妻恋は はれぬ霞のたちみなく覧 堯空

十六日 雲雀

千里ゆく雁の翅もかきりなく あかる雲雀の道はしらしな 堯空

山の端にのこれるかけもくもりなく 空に声きく夕ひはりかな 公条

そことなくあかるひはりは中空に いかなる雲の床さたむらむ 実世

十七日 遊糸

世中はへかたく見ゆる糸ゆふの あるをありともいはんかたなき 堯空

入日さす夕くれなひの色深く 思ひみたれてあそふ糸ゆふ 実世

春の日のなかきかきりをいかはかり くり出してかあそふいとゆふ 公条

十八日 春曙

おきてみるなこりもあかす春の夜の 夢かうつゝか明ほのゝそら 公条

秋の夜の千里をかけて見し月も 霞にこもるはるのあけほの 実世

この時と空もあひ思〔？↓物〕ならし 春は明ほの暁は春 堯空

十九日 遅日

くれかたきひかりもさそな春の色に ひま行駒の心とめけん 堯空

行すゑにまつことあらはくれぬまを いとひもすへき春の日なかさ 公条

たきのいとくのくりいたしてや長き日を 吉野ゝ山の花にくらさん 実世

廿日 志賀山越

雪ならて岩ほのうへもちる花の ところもわかぬしかの山こえ 公条

ちりしける花吹たつる春風に 浪をそわたる志かの山こえ 実世

ゆくときと人の心の花の色も みえてさりあへぬしかの山こえ 堯空

廿一日 三月三日

あひにあひて空も花にや酔のうちの 光さしそふ春のさかつき 堯空

なへてけふ花さく桃の紅に ふむ跡あをき野への遠近 公条

けふといへは物いはぬ花も三日月の 光に千世の色やそふらむ 実世

廿二日 蛙

世におほふ春のひかりを井のうち心せはくもなくかはつかな 公条
名にしおふ井てのかはつがなくこゑは 春も夕のあはれそひけり 実世
たのみしは誰にかひなき思ひをか みてのかはつのおねにも立らん 堯空

廿三日 残春

したひみる藤山吹の一さかり ちらすは春もくれしとそ思 公条
けふそおもふ花ものこらぬ木のもとを しめても春のかたみ成とは 実世
いまいくかありとも春や花鳥を をくりつくさはかひなからまし 堯空

廿四日 新樹

名残あれやしけるなかに花の木は 色もにほひもことにみえける 堯空
朝な／＼ちりにし花のおもかけに たちそふ木／＼のわか緑かな 公条
あさみとり木／＼の青葉も神な月 時雨る／＼比に色やかはらむ 実世

廿五日 夏草

いまよりの古郷いかに夏深く しける草葉に道はたえけり 実世
茂りあひて草に道なき山さとは 夏そ人めの「^{かれ}？↓^{かれ}」はてぬへき 堯空
かり衣いさわげゆかん夏草は ぬる／＼はかりの露もをかしな 公条

廿六日 賀茂祭

神まつるけふはいくその影をかは みたらし川のゆき／＼なるらん 堯空
神かきに行すゑとをしあふひ草 いく世かけても。^{おなし}二葉^はなからに 実世
ところせくたつるみてくらかさり馬 神もやいさむ賀茂の瑞籬 公条

廿七日 鶺鴒河

たきすつる鶺鴒河のか／＼りほの／＼と 朝河水にうちけふりつゝ 堯空
うかひふねいとひやすらん篝火の 月になりゆく瀬／＼の川なみ 実世
篝火の水のうへにもきえかたき つみをはいかに鶺鴒さす也 公条

廿八日 夏夜

乱れとふほたるはしるやくる／＼夜の いまいくかあらは秋風の空 堯空
やすらはて月もいてけり山の端の ゆふやみしらぬ夏の夜の空 公条
まどろまでいく夜なれけんみしかよの 月にこと／＼ふ山郭公 実世

廿九日 夏衣

みるま／＼に衣手す／＼し白妙の 天の香久山四方にはれつゝ 堯空
池水のす／＼しき色をから衣 はちすの糸のをりもなさはや 公条
夏といへはかへし衣のひとへたに うち吹風のへたてありけり 実世

卅日 扇

あつき日は手にまかせたる風ながら ぬるかりけりなおなし扇も 堯空
かひなしや人をけかせる塵をしも はらひつくさぬ扇なりせは 公条
手にならすあふきの風もさ夜深て さらに夏なき閨のうちかな 実世

十月一日 夕顔

白妙の花の夕かほたそかれは しつやの物になしてみましや 堯空
ほのかなる入日かくれのかきねをも さたかにみする夕かほの花 実世
賤士か家は軒端にか／＼りさく花の ひもゆふかほを光成けり 公条

二日 晚立

雲は又あとよりはれて山風の こえ行末や夕立の雨 実世
あら海の浪のすかたもふく風の 空にたちくる夕立の雲 公条
雨を待草木もたへす吹風の 野分たちたる夕立の空 堯空

三日 蝉

色かはる露の木の葉も又やみん きけは今朝はた蝉の初こゑ 堯空
かねてより秋やかなしき空蝉の 木の葉の露の朝夕になく 実世
木かくれば秋もやちかき蝉の羽の うすくなりゆく日のひかりかな 公条

四日 残暑

をく露の秋をは今朝の程にして のこるあつきそきゆる空なき 公条
秋やこし袖にはしらぬ風のをとを 四方の草木の上にとはゝや 実世
むすひてしならひはいつかわすれ水 秋をあさしとあつき日影に 堯空

五日 乞巧奠

雲のうへにたむくることのしらへにも ひきやはとむるほしあひの空 実世
いく秋かほしのちきりは一夜をも 猶たちはてぬ琴の緒にして 公条
たへかたき契をやおもふかすことも 二のほしのなかのほそ緒は 堯空

六日 稻妻

はかなしや草葉にやとる露よりも 猶きえやすき稲つまのかけ 実世
きえにけり草葉は露もあまるらん をき所なき稻妻のかけ 公条
見すや此老ののこりの月日にそ あたくらへするいなつまの影 堯空

七日 鶉

露さむきむしもかけとや鳴よらん 野へはうつらの床の秋風 公条
風のをとにうつら鳴なる夕暮は ま野ゝ入江の浪や立ちむ 実世
嵐ふく月の入さのかたうつら 床さむからし声もおしまぬ 堯空

八日 野分

おもひやる玉の台も露くたく 野分はさそなすゝのしの屋を 堯空
庭の西は尾花の浪もたゝよひて 野分の跡の水のうき草 公条
しめをきし庭はの千草も時の間の 野分になして身をくたく哉 実世

九日 秋雨

秋来ては色こき木ゝのみとりをも いかなる雨の染かへすらむ 実世
雨の音はふりみふらすみ吹風に たえぬ露ちる軒の萩原 公条
色をこそ木の葉は染るまゝならぬ はては音をも雨になせとや 堯空

十日 秋夕

なかもわひぬ夕はわきてとはかりを たかいひをきし秋にはあらねと 堯空
たちいてゝ行かたもなし夕霧の そらにみちたる秋のおもひは 公条
露ふかきかきねのむしのこゑも又 秋は夕の物にそありける 実世

十一日 秋田

山田もろしつか心やいかならむ 稲葉をわくるさほしかのこゑ 実世
うすくこき田面の色やかた岡の 木すゑの秋をいそきかほなる 堯空
をく露のわさ田かりかね今朝鳴て 紅葉をいそく岡のへの秋 公条

十二日 鳴

おもふ事なかはゝつきて永き夜を うちまとろめは鳴の羽かき 堯空
〔舟はいま↓岡のうちは〕^{うち}また夜ふかくもあけやらて ね覚さひしき鳴のはねかき 実世
いく里のねさめ〳〵をかそへてか 夜な〳〵鳴の百羽かくらん 公条

十三日 広沢池眺望

すむ月の千里をかけて広沢の 池はそこひもしらぬ影かな 公条
月はいま山の嵐も音たえて しつかにすめるひろさはの池 実世
行て見はいつくはありとも月は先 西こそ秋の広沢の池 堯空

十四日 蔦

たえず吹松かせなから色に出て かゝれる蔦に秋はみえけり 公条
はふ蔦の色をはさらに忘れきて 紅葉してけるいはほとそみる 堯空
露霜やかゝれるつたを染つらむ 軒もかきほも色付にけり 実世

十五日 柞

へたてゆく色ともみえすさほ山の はゝその紅葉うす霧の空 公条
わかためはこれを干しほと柞原 時雨つくさてちらんとすらむ 堯空
下草はくれなゐふかく色つきぬ はゝその森の露やいかなる 実世

十六日 九月九日

天津星のひかりにちかき山高み のほりてむかふ菊のさかつき 公条
しきしまのやまとはあらぬことの葉を けふはた菊の露にみかきて 堯空
下露の淵となるまで君か代を けふしら菊のはなに契らむ 実世

十七日 秋霜

露なからしほれもあへぬ草のうへ〔にの↓に〕 秋をく霜そ色も寒けき 公条
もとゆひにはらひし後の秋もはや 十とせの霜の身につもりける 堯空
わかのうちやあしへの鶴もをく霜に 秋なかしとやなきあかすらむ 実世

十八日 暮秋

なかしとおもひはてし夜なくも あけてはくる秋の空かな 公条
龍田姫ふるさといつくもみち葉の 錦たちきてゆかんとすらむ 堯空
程もなくくれ行秋のかたみとて のこるかひやは有明の月 実世

十九日 落葉

むら時雨染けん四方の木末をも けふ吹つくす山風のごゑ 実世
音もたしくれに成て山風の 吹をもまたすふる木の葉哉 公条
たまゆらもとの梢にかへさはや そらにみたる風の紅葉ゝ 堯空

廿日 残菊

秋の草の残るとはみすうつろふは さらにさきいつる花にそ有ける 公条
神無月木の葉の後はきくの花 時雨やそめて色かはるらん 堯空
くれなひにまたさきかはる白菊は まかきを霜やよきてをくらむ 実世

廿一日 枯野

霜かれはたかゆかりともしらぬ野ゝ 草の原まであはれとそみる 堯空
秋萩のふる枝のほかはかれはてしめさしをかん野へとしもなし 公条
むしの音も霜かれはてし秋草の 花のあとなき野へのさひしさ 実世

廿二日 霽

夜もすからみそれにさやく篠の葉の み山は雪のおもひやられて 堯空
雨やこほる雪やとけぬるとはかりも そらにみそのわかすふりくる 公条
かきくもりいく夜みその音さえて 雪けにのこる四方のうき雲 実世

廿三日 野行幸

たまさかのみゆきはしるやむら鳥の かけをならひの岡の池水 公条
さかの山けふのみゆきのおりにあひて あられを草の玉やしくらん 実世
芹川のなかれてたえし昔たに まれの行幸のあとをとひけん 堯空

廿四日 冬朝

かさなれる朝なくのこほりより さむくなり行程はみえけり 公条
あけわたる雲ぬほのかに行月の かけきえのこる庭の白雪 実世
見ややこの西こそ秋とたれかいひし 朝日にむかふ嶺のはつ雪 堯空

廿五日 寒松

夕ま暮さゆる嵐の音そふは 浪やこゆらむ末のまつ山 実世
声そふる梢もなしや木枯の のちはひとりの松に吹なる 公条
いつも聞山風ながら霜さむき 松はつらくも吹心ちして 堯空

廿六日 椎柴

山里はとふ人もなししゐしはの しはしとたのむ此世ながらに 実世
山人もあらしはけしき椎柴は 心のまゝにおらすやありけん 公条
猿さけふ月にはけしき木枯を わか身ひとつの嶺の椎柴 堯空

廿七日 衾

老か身はひとり衾のかたはらに 人なき床そすさましけなる 堯空
閨のうちひひとりふすまを引かけて もりあかす月の影そさむけき 実世
をし鳥のうはけの霜もしらされや ふすまのしたの春の心に 公条

廿八日 仏名

かゝけつる竹の灯さ夜ふけて つみもや友にきえんとすらむ 実世
一声もとなふる御名はあたらし 三世の仏のひろきめぐみに 堯空
つもりけるつみも仏のみなからに 雪よりもまつきえやはつらん 公条

廿九日 初恋

われなから心のおくもしらぬかな きのはあらぬけふの思ひに 実世
紅のまつしほはくちなしの それともみえしいはぬ色とて 堯空
色といへはこきもうすきもしらぎぬの しらすなからにおもひそめぬる 公条

十一月一日 忍恋

いかにせむいはての山のいはすとも 時雨や袖の色にいてまし 実世
せくとでもかきりこそあれもらさては えそ山川の水のしらなみ 堯空
こゝろたゝしのふの露をはらひつゝ 色にはいてし軒の松風 公条

二日 聞恋

なかめてもいふかひなしや行かりの こゑはかりなる雲のまよひに 実世
しれかしなたゝなにとなき風の音 虫のねにたに思ひある世を 堯空
えそしらぬ初秋風の萩の声 きくよりいかに身にはしむらん 公条

三日 見恋

あなたならは手ことにおらん桜花 見てのみ人の物おもへとや 公条
行すゑのちきりもしらすいたつらに よそにや人をみてもやみなん 実世
ほのかなる面影ながら身にしめて おもひあはする夢。たにみん 堯空

四日 尋恋

たとりこしかひこそなけれみわの山 あらぬあらしの身をしほりつゝ 実世
尋わひぬつもるおもひはふる雪の 杉の葉いつくやとの夕くれ 公条
わけわひぬ後みんとこそ浅茅原 心のしめをさしてこしかと 堯空

五日 祈恋

おもふにもかたかりぬへきえにしあれと 契むすふの神ならば神 堯空
くりかへしかけていのるもかひなしや たえぬなけきのもりのしめ縄 実世
神たにもうけすとならはいのるをも まことなしとやいひもなされん 公条

六日 契恋

たのめてしあとこそなけれ吹風に なかむるすゑや空のうき雲 実世
あはれいかにとし月とをくたのむ身は さためなきをもわすれはてぬる 公条
まことなき物とみつゝもたのみてそ かはらは後のかことにもせん 堯空

七日 待恋

川風のこよひもふけぬかたしきの わか衣手や宇治の橋姫 堯空
さはりある夜をかさねこし雨とのみ 我涙さへふりやそふらん 公条
なかめしと思ふ物から夕まくれ まつはあらしのさはきもそする 実世

八日 遇恋

あかすおもふ心はさらにはてにきを 逢をかきりと誰かいひけん 堯空
あふといへは人にとけぬるうらみこそ あけやすき夜のうへや成ぬれ 公条
から衣今夜かさねし袖のうへは せきあへさりしなみたともなし 実世

九日 別恋

鳥かねのうきにのみやは限ありて あくる別の空をなさまし 堯空
うき物と思ひなからもありあけの 月はわかれのかたみなりすや 実世
あひおもふみなかみならば涙川 なかれてかくはわかれしもなし 公条

十日 顕恋

露にてもまた色みせぬことの葉を いかなる風のちらしそめけん 堯空
袖の浪をむねのけふりにたえすのみ 立いてゝよそにあらはれにける 実世
行かへり口かためしもあたにのみ 人めの関のもりてくるしき 公条

十一日 稀恋

しのへとや花のたよりの春過て おもひけぬへき雪の山さと 堯空
玉さかのあふ瀬なからやたなはたも たえぬ契の末たのむらむ 実世
あた浪のたてるのみにてあまのかる めつらしきよりぬる袖かな 公条

十二日 絶恋

衣手にかけんともなしよそにのみ いまは軒はのさゝかにの糸 堯空
逢事もなからのはしのたえはてし むかしかたりにならむとやする 実世
あひみしは見はてぬ夢の行急にて たえはてにける身をいかにせん 公条

十三日 怨恋

いはしたゝ思ひつめてしうきふしは かすへつくさん物としもなし 堯空
みせはやな山となるてふ塵ならて つもるうらみのはらふかたなき 公条
それとたはにいひもやられぬおり／＼の つらさやつもるうらみなるらむ 実世

十四日 旧恋

うかりける契にかゝる玉の緒は なかくてたえぬ物おもへとや 堯空
かそふれは春夏すきぬ秋の空 われをふるせる名さへうらめし 公条
とし月をたえぬおもひにをくりきて 身のいたつらにくちやはてなん 実世

十五日 暁恋

はかなしやねなきかちたる夜な／＼は せめてはあくる光まちける 堯空
ひとりねはわかれにはもあらぬ鳥の音に おとろ「かつく」ゆめなこりをそ思ふ 実世
いつか身にこふる心のさめぬへき ねさめはあらぬおもひそひつゝ 公条

十六日 朝恋

霧のうちはまた夜もふかし立かへり おりて「も↓を」見はや今朝のあさかほ 堯空
いそかすよおき出ん空も何ならぬ いたつらふしのねてのあさけは 公条
しれかしな草葉の露もいつる日に きえかへりつゝ思ふこゝろを 実世

十七日 昼恋

明日香川あすのわたりを瀬を人にしりかたみ たとりきて くらしかたしなけふのひるまも 堯空
見すやこのあはてしかへる衣手は ひるのにしきの色もかひなし 公条
浦浪もしほのひるまはあるものを おもひにたえぬわかみなたかな 実世

十八日 夕恋

またはこそわか夕暮のそらならめ 心にかゝる雲風もなし 堯空
いつなれん契とてかは夕やみの たと／＼しくも行かへりぬる 公条
待なれしいく夕暮のおきのをとの こゝろくたけて物おもふらむ 実世

十九日 夜恋

つく／＼とむかへは閨のともし火も わか涙よりぬるゝかほなる 堯空
ちきりをきて心かはさはいかならん 人しつまりてふかき夜のなか 公条
あはぬ夜をなになけかまし床の上に かならずかよふ夢もありせは 実世

廿日 老恋

よしやたゝおもひよはるも老か身は 恋にしにする名にたゝめやは 堯空
恋しなは世のことはりになりぬへき 花のおもひやいふかひもなき 公条
玉さかにあひ見る夢もいたつらに 覚てや老の思ひそふらむ 実世

廿一日 幼恋

うらなしと見ゆる物から唐ころも ひとへ心をいかゝたのまん 堯空
あちきなくねよけにみゆるおもかけや 我恋草のたねをまきける 公条
しれかしな露のみふかきくれ竹の わか葉をわたる風のこゝろを 実世

廿二日 遠恋

おほつかなかきやる文のこたへしも 程ふるまゝの中のはるけさ 公条
いつまでか人のこゝろの石木をは かさなる山にそへてしのはん 堯空
思ひやるこゝろは雲もへたてしを さかひはるけき中そわりなき 実世

廿三日 近恋

まどろまぬうつゝにいつか影も見ん へたてはかへの一重なからに 堯空
人はよにゆるさしとみる中かきを なにとはかなくいひへたつらん 公条
かくはかりなにしたふらむ中かきの へたてありける人のこゝろを 実世

廿四日 旅恋

うつろはてまたんはいさや一夜ねて 朝たつ野への萩のうへの露 堯空
わするなよとりあへさりし草枕 むすひすてゝはやまん物かは 公条
別れこしその面影はたひころも 過行跡にかへるうらなみ 実世

廿五日 寄月恋

思ひあまりなかむるまゝにおほえすも 涙を月にしられそめぬる 堯空
夜をへてはおもひますてふ心をは 光にもみよ夕月のかけ 公条
めぐりあはん契もしらす行月の 影ほのかにもおもひそめぬる 実世

廿六日 寄雲恋

つれなさのかきりみるへき道やなき 雲のかゝらぬ山はありとも 堯空
ゆくときとそらにみちぬるうき雲や おもふ中かはちへまさるらん 公条
たえずのみこゝろは空にうきくもの 行かたもなきわかおもひかな 実世

廿七日 寄風恋

おほ空にさはるかたなき風とても いつかつたへしおもふことの葉 堯空
塵ならてあたに立けるうき名こそ 風のうへなる我身なりけれ 公条
夕ま暮荻の葉にをく露なれや 風にきえても物おもふ身は 実世

廿八日 寄雨恋

待よひに鐘の音さへうちしめる 雨は千とせをふる心ちして 堯空
いまはたゝ思たらねとふる雨に ぬるともいかゝ夢をたにみん 公条
五月やみいかにせよとかふる雨の はるゝ時なき物おもふらむ 実世

廿九日 寄煙恋

けちわひぬはかなく人にたきそめし おもひをさらにくゆるけふりは 堯空
かひなしやあさまのたけの煙にも とかむはかりのおもひならずは 公条
せきかたき涙のみかはおもひゆへ 二かかれてたえぬむねのけふり^{よ?} 実世

卅日 寄山恋

へたてなき道を見るにはいもとせの 山てふ名さへうらやまれつゝ 堯空
いひよらむ道ははるけき山にして 心たかくも人のみゆらん 公条
たつねみんつれなき人のこゝろにも おもひ入佐の山ちありやと 実世

後十一月一日 寄河恋

河とならば湫瀬あるへきことほりも しらぬ涙そふかさそひ行 堯空
わたるより色になるてふそめ川や 涙の袖のなかなるらむ 公条
よるへなくおもひみたれて川のせに なひく玉藻の身をやつくさむ 実世

二日 寄海恋

床のうへはあれにしまゝのわたつ海に かりのみるめもいつを待らん 堯空
わたつ海のそここゝろもしらてのみ ふかくはいかゝたのみはつへき 公条
うらみある夜るのおもひはわたつ海の ちひろの底もふかゝらぬかな 実世

三日 寄関恋

人めのみたえぬなけきの中道や こえんかたなきあふさかの関 堯空
もる人にしらせてしかなせきしなき 心をつくす恋ちなりとは 公条
いく夜をかわかかよひ路の関の戸に うちもねられぬ物おもふらむ 実世

四日 寄橋恋

おもへ此世はうき橋の程もなし 夢のたゝちもおなし契を 堯空
わくかたのこゝろもしらす一橋 命にかけて恋わたるかな 公条
玉さかにふみ見る事をうつゝにも しはしなさはや夢のうき橋 実世

五日 寄草恋

わかゝたにうへまし物をわすれ草 はやくも人にひきとられぬる 堯空
うつろはん物とはしりぬ月草の 露ことならぬ人のこゝろは 実世
きぬ／＼のあか月ふかき露霜を みるにかなしき草のうへかな 公条

六日 寄木恋

契をかほうつろはさらん花さくら 枝をつらぬる木にもおひはや 堯空
いつまでかをのれひとりとなほき木は 枝をかはん物としもなき 公条
桐の葉もおつる涙のかすそへて 人の心の秋そしらるゝ 実世

七日 寄鳥恋

分きつる跡はむかしの庭たゞき はらふ路をはなにをしふらん 堯空
みし夢の面影もたゞ鳥かねの 吾妻ときかは猶もたのまん 公条
千鳥なく入江の浪のよるといへは われもねにへて物思かな 実世

八日 寄獣恋

うち過て影をもとめぬわか宿は もとこし道駒のしる道もなし 堯空
めぐりあはん行末たのむ小車の うしともいかゞいひはなつへき 公条
まてといはゞ虎ふす野へもいとほしな あふにかへなん命とおもへは 実世

九日 寄虫恋

とりいてゝみるにわすれぬ玉章は 心にしみのすてもやられす 堯空
音になくもかひなき身そと空蟬の から紅の袖をみせはや 公条
夏虫の身よりあまれる思ひたに ひるはたえまのありとこそみれ 実世

十日 寄笛恋

笛竹のうきねをかへてわか思ひ たりたんなどもいつかきかせん 堯空
笛竹のもとのこゝろのまゝならば かはかりつらきねにはたてしを 実世
うこきなき石もいかにとふく笛の とをる心を人のしれかし 公条

十一日 寄琴恋

えならずとおもふ物からことのねの あたなるかたにすゝめるもうし 堯空
まつにまでかよはさりけることの音は たかわかれをかひきとゞむらむ 実世
ちきりあわてあはすはいかゞひく琴に 別の鶴のこゑをきくへき 公条

十二日 寄絵恋

見るうちはおもひもあらし筆の跡の うつし人にて言もかはさは 堯空
面影をうつしとゞめしふてのあとの かはらぬ色をこゝろともかな 実世
かきとゆめし雪のうちななる芭蕉葉の 世にたくひなきおもひとはしれ 公条

十三日 寄衣恋

かへらてもいたつらふしのさ夜衣 夢たにみえぬたひをかさねて 堯空
吹かへす衣のすそのうらみをは いく秋風にかさねきつらむ 実世
いつはりにすぐるはかりのから衣 糸もてぬはん物としもなし 公条

十四日 寄席恋

なけきわひぬる夜もしらぬすか蓆 七ふも三ふも塵のみそゐる 堯空
ひとりねはそのねもななき菅蓆 夜のおもひにあかしかねつゝ 公条
今はとて独ぬる夜のさむしろに かたしく物や涙なるらむ 実世

十五日 寄遊女恋

唐櫓をす水の煙も一すちに おもふかたにはなひくをそみる 堯空
たれとなくむすふ契の一夜たに 浪のうきねのさためなきかな 実世
あちきなくよせては帰る浪風の つなかぬ船のうきちきりかな 公条

十六日 寄傀儡恋

かゝみ山立よりしよりさま／＼に うつろのいろは見えけり 実世
なにゝかくうこく心そ木をけつり 糸をひくにしたくふすかたを 堯空
とりあへすかはす契のかりまくら 夢まほろしとみるにかなしき 公条

十七日 寄樵夫恋

ひろひもてゆふや真柴のつかのまも わすれぬ恋にみたれわひつゝ 堯空
いつまでとなげきこりつむ山人の 手にとるをのれ物おもふらん 公条
山人のすみかはしらすおのゝえの くつるは袖のうへとこそ見れ 実世

十八日 寄海人恋

あまのすむうらみつくしてことかたに うつろひぬともきかせてしかな 堯空
浦にすむあまにとはゝや塩のまの いつかあふせのかひはひろはん 公条
うらにたく海人のもしほ火下にのみ むせふけふりのたえまたになき 実世

十九日 寄商人恋

別をは心にかろく船出せし あとにむなしき波やこゆ^えらん 堯空
逢事のまれなるやとはあき人の よききぬなれやきたるかひなき 公条
よそにのみみわの市人たちさはき したやすからぬわか思ひかな 実世

為羽林稽古日課馳筆

無一首之可取可笑く

大永五年後十一月十九日

【略解題】

本書は、三条西家より弘文荘を経由して書陵部に蔵された（この間の経緯については、反町茂雄『一古書肆の思い出』 古典籍の奔流横溢』〔平凡社、一九八八・三 後に平凡社ライブラリ〕に記載がある）もので、巻末に「月明荘」の印記があることでそれと知られる。『弘文荘待買古書目』第二〇巻（一九五一年六月）、及び、第三〇巻（一九五七年一〇月）所掲。

本書の書誌・概要に関して、後者より引用しておく。

三条西家着到百首〔三条西実隆・公条・実世各自筆／大永五年成、原本〕一卷

紙高二八、二糎、楮紙三十五枚つぎ、長巻。和歌一首二行書。外題内題ともなく、直ちに本文に入る。九月十一日より始めて閏十一月十九日までの百日の間、連日一題一首づつ、実隆とその子公条、孫実世が詠み誌したもの。毎首に公条・実世は本名を署し、実隆は法名（堯空）を署。巻末には実隆の自筆で

為羽林稽古日課馳筆、無一首之可取、可笑く

大永五年後十一月十九日

とある。羽林は近衛中少将の唐名、こゝでは実世に当る。時に実隆七十歳、公条三十九歳、実世は弱冠わづか十五歳である。三条西家の庭訓が相当厳しかったであらう事が想像される。稀れに実隆の添削のあとがあるが、大部分実世の歌で、実隆自身のも二三首見られる。但し公条のものも殆んど無疵である。こゝにも実隆の人柄が偲ばれよう。原装、保存完好。桐箱入。三条西家旧蔵。「大日本歌書綜覧」未収。三条西家の全盛時代の三代の筆蹟と詠み口とを一巻の内に見得る点に興味がある。日毎に三人鼎座、祖父は知らず、父も子も苦吟しつゝ書き廻した事であらう。当時の現物が、かくも完全な形で残つて居る事は珍しい。

実隆は能筆を以つて当時聞えた人、従つて公条・実世ともその風で、一見よく似て居るが、おのづから段階をなして少しづつ見劣りがするのは是非もない。実世の稚さの目立つのは当然であるが、晩年まで筆致の艶かな実隆も、かく並べると流石に老の目立つ心地がする。

○

本書の書誌は、上掲『弘文荘待買古書目』に略述されているが、念のため、以下実際に調査した結果を記載しておく。

三条西家着到和歌 三条西実隆（堯空）・三条西公条・三条西実世（実

枝）詠。三条西家本。一軸。「函架番号」五〇三一一二五三。「装訂」卷子装。「法量」天地二八・一cm。「表紙」藍地、石畳文に花・流水（？）文様の金欄。「見返し」金銀砂子・箔を散らす。「外題」ナシ。「内題」ナシ。「本文」和歌一首二行書。歌題七字前後下げ。「紙数・法量」第一紙 縦二八・一×横三五cm（以下横寸法のみ記載）、第二紙〜第三八紙 四二cm、全長一五m八九cm。「料紙」楮紙。「蔵書印」巻頭に「函書／寮印」（方朱印、単郭、陽刻）、巻尾に「月明荘」（長方朱印、単郭、陽刻）各一顆あり。「書写者、書写年代」大永五年、実隆・公条・実枝各自筆。

○

実隆詠については、全て『雪玉集』十七巻に「百首」として収録される。北海道教育大学附属図書館蔵本を底本とする『新編私家集大成』では、百首の冒頭に「元日宴」の題があり、加えて、

余寒

今夜またさゆるあらしの鐘のをとは むすひやすらむ春のはつ霜（七四六九）とある。

また、実世詠も『三光院詠』に全て収録される。高松宮旧蔵本を底本とす

る『新編私家集大成』によれば、その巻頭には、

元日宴 九日 十五歳 実世 大永五年

自九月九日終後十一月廿九

余寒 十日

とある。よつて、もとは「元日宴・余寒・春氷・若草…」と続き、『六百番歌合』による組題であったことがわかる。『三光院詠』の記述に基づけば、大永五年（一五二五）九月九日に重陽の御祝に合せて詠み始めたことになろうが、いずれも「元日宴」は題のみであり、詳細は不明である。

なお、『三光院詠』には、

旧恋 十四日

かそふれは春夏過ぬ秋の空 我をふるせるなさへうらめし（公条殿）（六三）
として、公条の一首が混入している。

『雪玉集』及び『三光院詠』との異同を以下に列举する。

	(歌題)	(着到百首)	(雪玉集〔雪〕・三光院詠〔三〕)
志賀山越	浪をそわたる	波をそかくる〔三〕	
三月三日	空も花にや	空の花にや〔雪〕	
蛙	思ひをか	思ひをは〔雪〕	
新樹	時雨るゝ	時雨る〔三〕	
賀茂祭	いくその <small>おなし</small> 。二葉 <small>は</small> なからに	いくよの〔雪〕	
鵜河	たきすつる	おなし二葉は〔三〕	
夏衣	うち吹	たきすつら <small>本</small> 〔雪〕	
晩立	雲は	こちふく〔三〕	
残暑	草木	空は〔三〕	
稲妻	みすや此	草葉〔三〕	
野分	花庭の千草も	見はやこの〔雪〕	
		花の千種も〔三〕	

鳴	〔用はいま↓閨のうちは〕	ねやのうちは〔三〕
柞	色つきぬ	色つきて〔三〕
秋霜	秋もはや	秋ははや〔雪〕
	あしへの鶴も	あしへの露も〔三〕
残菊	さきかはる	咲かほる〔三〕
野行幸	あられを <small>も</small>	あられも〔三〕
袈	さむけき	さやけき〔三〕
忍恋	しらなみ	しからみ〔雪〕
別恋	かたみなり <small>りけり</small> や	かたみなりけり〔三〕
顕恋	袖の浪をむねのけふりに	そての波をむねのけふりの〔三〕
	立いてゝ	立いて〔三〕
怨恋	それそ <small>と</small> は	それそとは〔三〕
暁恋	わかれには	わかれにも〔三〕
朝恋	おとろ〔か↓く〕さ <small>ゆめ</small> れめ	おとろく夢の〔三〕
	おりて〔も↓を〕	おり <small>て</small> を〔雪〕
昼恋	あすのわたりを <small>たとりきて</small>	あすのわたりをたとりきて〔雪〕
	ひるまも	ひるまを〔雪〕
寄雲恋	雲のかゝらぬ	雲のからぬ〔雪〕
寄煙恋	けふりは <small>よ<small>（こ）</small></small>	けふりは〔三〕
寄橋恋	ふみ見る	見る〔三〕
寄鳥恋	をしふらん	おしむらん〔雪〕
	ねにへて	ねりたて〔三〕
寄獸恋	もとし道 <small>駒</small> の	もとし駒の〔雪〕
寄笛恋	たりたん	たかたん〔雪〕
寄絵恋	言もかはさは	言もかはさす〔雪〕
寄商人恋	波やこ <small>え</small> ゆらん	なみやこえなん〔雪〕

〔積文〕日高愛子、略解題〔日高愛子〔礎稿〕・武井和人〔補筆〕〕

2 伏見宮家五十首和歌 明応五・一〇

〔宮内庁書陵部図書寮文庫蔵伏見宮本（伏一七）〕

伏見宮家五十首和歌〔明応五年十月〕一卷（外題〔題簽〕）

霞間松

仁和寺宮

花ならぬ松もみとりのひとしほは かすみにそむるにほひとやみん

朝夕鶯

あさな／＼きゝそなれてもうくひすの 又ゆふこゑのあかすも有かな

〔夕こゑ定而作例候歟但夕のこゑの／＼と候はんするには劣てやきこ

え候らん〕

梅紅白

雪とみしこすゑなからにけれなるの こそめの梅のいろそことなる

堤辺柳

按察使

／＼なにゆへに人めつゝみのかけしめて 浪によりそふ青柳のいと

浦春月

わかのうちらや夕なみかすむ月影に けふりなそへそあまのもしほ火

花処と

たちよるも花よりほかの陰もなし かすむよし野の春の山ふみ

惜花経年

永宣朝臣

／＼こゝろとめておしむに年も古郷の はなこそ人のうき世なりけれ

菫染袖

つむ袖にうつるすみれもむらさきの ねすりのころも春にそめつゝ

溪歎冬

ちりうかふ花をやすきてやまふきの しからみかくるたにのしたみつ

暮春山

前内大臣

／＼たちかへるかたやいつこそ山のはの かすみそはるのゆくゑしるらし

岡新樹

かた岡のはゝその秋の一しほを わか葉に見する夏木たち哉

海辺郭公

海士のすむいそ山ちかきほとゝきす なのりすれともきゝはわかしな

夏草色々

さき立て夏野の草にさく花や 秋のにしきをおりはしむらん

閑居夏月

みるまゝにさし入影もほとなきや 竹の戸ほその夏の夜の月

嶺照射

音にたてぬあはれもよそに嶺つゝき ともしや鹿のおもひなるらん

河夕立

前内大臣

／＼ゆく雲もそらも敷にやはかるあすか川 溯せをわくる夕たちのあめ

松下水

よそよりもこゝそすゝしき秋をはや さそふみつある松のしたかけ

浜早秋

御詠

／＼なみ風のをとにそしるき来る秋は はま松かえのいろに見えねと

七夕枕

かはすまもあまの川原の浪まくら さそなほとなきあふせなるらん

聞萩歌枕

源宰相

／＼いねかての夜さむのまくらそはたてゝ あきかせかこつ軒やと敷のおきはら

朝草花

さく花もひかりを遙かあさな／＼ 盛とをけるつゆのはきはら

連夜翫月

待おしむ夜ころかさねてあくかるゝこゝろや空に月とすむ覽

見月傷老

御詠

／わかよはひかたふきかゝるなかそらの 月はしるらむ物そかなしき

雁迷霧雲

あききりのたえまにみえてゆくすゑも へたつる雲のころもかりかね

鹿声近

永宣朝臣

／かりねするまくらの山のあき風に 夢のあとゝふさをしかの声

名所菊

さゝなみのよるもわかれしおほ沢の みきわにさけるしら菊のはな

秋時雨

重經朝臣

／それとなき野山の草木色つきて 秋かせさむくふるしくれかな

落葉混雨

閨のうへにふるもすくもむら時雨 木の葉にまよふ音はわかれし

寒草霜

しもかれのまかきのおきのひと本に さひしさそへて風そをとす

山寒月

みねたかみゆふる雲のそのまゝに こほるか月のかけのさむけき

河水鳥

をのれのみたちあなく也水鳥の 鴨の川なみこほる夜すから

篠上霰

ゆふ露もこほりてむすふさゝの葉に みたれてさやく玉あられかな

雪中鷹狩

かりころもすそ野の原の雪の中に とかへるたかのあともしられす

夜仏名

御名をきく三世の仏にとしの内の つみはひと夜にきえやはつらむ

言出恋

前内大臣

／われなからうしや思ひのかきりをも しらするほとこの葉はなし

互忍久恋

かきりあらは逢夜もこそと年月を ともにしのふのころもへにけり

毎夕待恋

むなしくて昨日もすきつけふこすは あすのくれまてたへんものかは

夢中逢恋

はかなしやあひみし夢のたくひをも うつゝにのこす一ふしもかな

契後世恋

人もわれもそれとしらすはかひもあらし ちきりしまゝにむまれあふとも

〔一作意近來の集に見及心ちし候／但不及引勘候於其体尤神妙／若

慥無同類候は可奉付墨候〕

待返書恋

重經朝臣

／我のみやあはれともみんないたつらに かへすはつらき中のたまつさ

白地恋

世にもるゝうき名よいかにきたかには 見もせぬほとのかなのちきりに

忘住所恋

いかにせんをしへしやとゝたつぬれば あらぬさまなる人のいらへを

欲絶恋

あはれとはおもひもよらてかたいとの なにうきふしにたえんとやする

恨身恋

源宰相

／身のほとのかゝらざりせはかゝらしと 人のうきにもわれそかなしき

山樹高低

山たかみ木ゝもさま／＼年ふりぬ さかれる枝もなをきこすゑも

浜楸

こすしほに夕なみあらきはまひさき つゆ霜またてまつやちるらん

水郷眺望

みるかうちにこきゆくあとはをひてふく をともたかせのよとの川ふね

羈中浦

ほすひまもなみ路になれてしほるなり 日をふる旅のそてのうらかせ

述懷淚

めくみある世にあはすはとをろかなる 身をおもふにも袖そほされぬ

社頭祝

もろ人のあふくこゝろに神も又 やはらくひかり代をてらすらん

僻案愚点十三首

御詠 二首

仁和寺宮 一首

前内大臣 三首

按察使 一首

源宰相 二首

重經朝臣 二首

永宣朝臣 二首

【略解題】

本書の書誌は以下の通り。

伏見宮家五十首和歌 明応五・一〇 邦高親王（「御詠」）・道永法

親王（「仁和寺宮」）・今出川公興（「内大臣」）・綾小路俊量（歟、

「按察使」）・源（田向）重治（「源宰相」）・源（庭田）重経（「重

経朝臣」）・高倉永宣（「永宣朝臣」）詠、三条西実隆点。伏見宮本。

一軸。「函架番号」伏一七。「装訂」卷子装。「法量」天地三一・

二cm。「表紙」紫無地の絹布。「外題」伏見宮五十首和歌明応五年十月

一卷（後・左・簽・書）。「内題」ナシ「本文」和歌一首二行書。歌

題二〜三字下げ。「紙数・法量」第一紙縦三一×横四二cm（以下横

寸法のみ記載）、第二紙縦四四cm、第三紙縦四四・五cm、第四紙縦四

四・五cm、第五紙縦四四・五cm、第六紙縦四四・五cm、第七紙縦四四

・五cm、第八紙縦四四・五cm、第九紙縦四四・五cm、第十紙縦四三

・二cm以上、全長四m四〇・七cm。第十一紙として、一六cmの後補

白紙を軸に継ぐ。「料紙」楮紙。「蔵書印」巻頭に「図書／寮印」（方

朱印、単郭、陽刻）一顆あり。「書写者、書写年代」室町後期写（明

応五年十月写歟）。「備考」三条西実隆による合点、末尾に作者次第

あり。合点のかけられた歌のみ作者名を記す。端裏書に「侍従大納

言點明應五年十月廿〇」と墨書さる。

本歌会について、井上宗雄「室町後期歌書伝本書目稿」（『中世歌壇史

の研究 室町後期』）に、以下の如くある。

〔明応五年〕十月5 伏見宮五十首和歌 書陵部駈 「霞間松」以

下 邦高・道永・公興・按察使（俊量か）・重治・重経・永宣
実隆点（点あるものみの名を現わす）

所収歌は全て、新編国歌大観・新編私家集大成には見出せない、未翻
刻資料と目される。

本書端裏に「侍従大納言点」とある。『実隆公記』明応五年一〇月二
四日条に「又自竹園所給置之五十首合点奉之（十三首）了」とある記述
と、本書の「僻案愚点十三首」という記事が一致するので、端裏書にい
う通り、合点は三条西実隆の所為と確認出来る。

従って、本歌会は、明応五年（一四九六）一〇月二四日を（『実隆公記』
の「給置」という表現を重んずれば）さほどは遡らぬ時、伏見宮邦高親王
が主催し、その上で、三条西実隆に合点を依頼した。実隆は合点及び評語
を付し、一〇月二四日に奉った、と結論づけることが出来る。

なお、合点を付した歌にのみ名を記してあるので、その他無記名の詠
作者はそれぞれ誰であったかは未詳。

（釈文〓山本啓介、略解題〓山本啓介・武井和人）

③ 続三十首和歌 大永元・一一

〔宮内庁書陵部図書寮文庫蔵伏見宮本（伏一三四）〕

続三十首和歌大永元年（外題）〔題簽〕

続三十首倭哥（端作題）

遠郷時雨

うつりゆく雲に入日のやま見えて とをさとめくる夕時雨かな

浜辺寒蘆

をきあかす霜のむら蘆さやく也 なみまへよるのあらき浜辺に

月照網代

御製

月かけのいさよふなみのゆくゑをも あしろの床にみてあかすらむ

連日鷹狩

今朝の雪けふの友よとうち出て いくたひ野へにかりくらす覧

氷留水声

木かくれてゆく音もなしあしひきの やました水やこほりそむらむ

寒閨聞霰

明やらぬ閨のやまかせ夜を寒み ねさめてきけは霰ふるなり

水鳥馴舟

岸による小船のさほのみなれてや なみたちさらぬ水とりの声

雪中残雁

親王御方

けさのあさけ雁かね寒し小山田の かりほの庵のはつ雪の空

眺望山雪

御製

雲かくす程はしはしとみるかうちに 晴ていくえの雪の山のは

雪埋苔径

をのつからちりなき苔もうつもれて 日とにつもれる雪のしたみち

祈難逢恋

貴船川たのみをかけし年浪は うきせにのみやうつりゆくらむ

不堪待恋

中務卿宮

なをさりに思ひをきてもとはさらは この夕露の身は消ぬへし

深更帰恋

うらめしや今こそ月も出ぬるを いかになかれて夜を残すらむ

後朝切恋

のこる身よ今朝の思ひにたへさらは 逢夜にかへぬいのちなりとも

憑誓言恋

申かけていひしなからの見しめなは なかゝれとおもふわかいのちかな

歎無名恋

重親朝臣

跡もなくならはこそあらめ村とりの たちにしはたうそ名なりとて

非心離恋

ますかゝみかけははなれしとはかりは あひおもふ中のことはそかし

見形厭恋

おもふとていとふゆへをも忘れけり むかはゝひとにつましき身を

披書恨恋

中務卿宮

おもふまにとりもなされぬ一筆の 人のことのはうらみそへつゝ

絶経年恋

親王御方

思ひ出るみちもなくてやわすれ水 としふるまゝにむすひたえ釵

残月越関

あふさかや関の清水も名のみして ゆくそてしほるあり明の空

嶺林猿叫

鷲尾中納言

雨の色は雲のころもにうるほひて たかねのこすゑましらなく也

江雨鷺飛

雨にきる蓑もしほれてゆく鷺や 　いり江の水に又かへるらむ

樵路日暮

こりはてぬわさやかなしき柴人の 　山ちくるしくかへる日ことに

漁舟連波

釣舟のかす見し程そのこりける 　くれゆくなみのあまのいさり火

山亭人稀

山ふかみひとりのためのみちなるは 　はらはしつもる雪にまかせて

風破旅夢

あらしふく夢も関路をこえわひて 　ぬる夜物うきあしからのやま

蒼海雲低

山のはもつゝかぬなみのおきつ嶋 　ありとは見えて雲のかゝれる

夜涙余袖

いづくにもうきねの夢よ敷妙の 　わか袖わかぬなみやかくらん

竹契遐年

をく霜や色にみすらん世ゝへても 　猶ときはなる竹のこゝろを

僻案愚点十首

堯空上

御製 二首

親王御方 三首

重親朝臣 二首

中務卿宮 二首

鷺尾中納言 一首

【略解題】

本書の書誌は以下の通り。

続三十首和歌 後柏原天皇・知仁親王・貞敦親王御詠、鷲尾隆康・庭

田重親・冷泉永宣等詠、堯空（三条西実隆）点。伏見宮本。一軸。「函

架番号」伏一・二四。「装訂」卷子装。「法量」天地二七・二cm。「表紙」

紫無地の絹布。「外題」続三十首和歌大永元年（後・左・簽・書）。「内

題」続三十首倭哥。「本文」和歌一首二行書。歌題二字下げ。「紙数・

法量」第一紙Ⅱ縦二七・二×横四三cm（以下横寸法のみ記載）、第二

紙Ⅱ四三cm、第三紙Ⅱ四二・八cm、第四紙Ⅱ四二・六cm。以上、全長

一m七一・四cm。第五紙として、三五・四cmの後補白紙を軸に継ぐ。

「料紙」楮紙。「蔵書印」巻頭に「凶書／寮印」（方朱印、单郭、陽刻）

一顆あり。「書写者、書写年代」室町末期写（大永元年写歟）。「備考」

堯空（実隆）識語及び合点、末尾に作者次第あり。合点のかけられた

歌のみ作者名を記す。端裏書に「破損」元十一晦日」と墨書さる。

本歌会について、井上宗雄「室町後期歌書伝本書目稿」〔中世歌壇史の

研究 室町後期〕、「ハ武井補」に、以下の如くある。

〔大永元年〕十二月3 内裏三十首続歌 続三十首和歌（書陵部伏見

宮本〔即チ本書也〕肝と）・公宴続歌18・〔京都府立総合資料館蔵〕

内裏御会・後崇光院御詠（書陵部、合綴）「月照網代」以下〔誤也。

遠郷時雨以下トスベシ〕 後柏原・知仁〔親王御方〕・中務卿宮（貞

敦）・隆康〔鷲尾中納言〕・〔庭田〕重親・〔冷泉〕永宣 堯空点

井上が掲げた四本の内、三十首すべてを収めるのは、本書と『後崇光院

御詠（五九首）〕〔伏・一八一、江戸初期写〕（作者付同文。ただし、作者

名記載に漏れがあるなど、善本とはいひがたい）の二本。『公宴続歌』『内

裏御会』は、合点がかけられた歌のみを抄出する。

『公宴続歌』『内裏御会』の作者付等は、以下のやうになつてゐる。

御製二首親王御方三首

中務卿宮二首 鷲尾中納言一首 重親朝臣二首

御人数六人冷泉前中納言也 此一巻清書

勅筆灯下而卒書写之

大永元年十二月三日〔内裏御会〕による）

「室町後期歌書伝本書目稿」の記述（日付、永宣の付加等）は、この記

事に基づいてゐると思はれる。ただし、端裏書の記載を重んずれば、大永

元年（一五二一）十一月三〇日に歌会張行。勅筆によつて清書がなされ、

その勅筆本を以て翌一二月に転写がなされたと見るべきか。

本続歌の歌題について、知り得たことを略述しておく。この三十題は、

『雪玉集』六九六九〇六七（新編国歌大観番号）に見える「着到百首

和歌永正六年九月九日」の題（冬・恋・雑）に全て含まれる。冬歌・雑歌は、

概ね歌順が一致するが、恋歌は歌順に前後が見られる。

このことから推して、この続歌の題者は、実隆と見て良いかとも思ふが、

なほ、関連資料を博搜したい。

なほ、貞敦親王には同時期のものとして、宮内庁書陵部図書寮文庫蔵『貞

敦親王着到百首和歌（永正六年九月―十二月）〕〔伏一五二六）があるが、

それとは歌題が一致しない。

（武井和人）

4 伏見宮家続百首和歌 大永三・五

〔宮内庁書陵部図書寮文庫蔵伏見宮本（伏一二五）〕

大永三年五月（外題〔題簽〕）

続百首和哥（端作題）

立春

いく万としもつもりて塵ひちの 山またやまに春やたつらん

早春鶯

春来ても霜まよふ野は初草の うらわかきねに鶯の鳴

山霞

たちそむるかすみをみせてほの／＼と あくると山にのこる雪かな

海辺霞

春風はふくとしもなく山かけて かすみそわたる海こしの里
〔結句このまじからす候哉〕

余寒雪

さえかへり松の戸ほその夜あらしに きえん空なき今朝の雪哉 篠

子日松

二葉よりその名もきけはかくはしき ねのひの小松いまやひく覧

沢若菜

しら雪のまたきえやらぬ春の野は 沢辺のわかなつみやかぬらん

野早蕨

藤つゝし折かさしても猶家つとに 又おりそふる野へのさわらひ

窓梅

すかのねのなかき春日もむめの花 なをあかなくとむかふ山まと
〔山まと哥による歟、聞なれすや、いかにも不甘心候〕

路梅

たちかへりたれにかたらむゆく袖に かくさたかなる梅のした風 篠

河辺柳

うちなひく河そひ柳うつろひて ひとりふかむる峯の水かけ
〔水かけとなくとも、水はかりにも事足ぬへくや〕

夕春雨

空はたゝ霞にくれて夕露の 軒はうるほふ春雨の跡

春月朧

おしとのみなかめし影もおほろけに ありやなしやの春の夜の月

帰雁幽

雲かすみいく重かさなる山のはに それかあらぬかかへる雁かね

栽花

いかならん契もありてうへをきし わかみなれ木の花を待みは

折花

心あらは風もよきよとみぬ人に とを山さくら手折てそ行 桂

落花

もらさしとおほふ霞の袖になと つゝみもあへす花のちるらん

籬款冬

小蝶とふゆくゑをみれば山吹の 花の八重かきひまもとむ也

池藤

そこひなき色をふかめて池水の なみにもあらぬ松の藤波

三月尽

我身あれはあはれいくとせけふのみと おほくの春をしたひきぬらん

簷新樹

しけりゆく梢もたかき夏木立 まやのあまりの月はもりこす

垣卯花

わするへき春をへたつる中垣に 又うの花の色をそふらん

待郭公

ほととぎすなかなすはあらしむら雨の 雲のたえまの暮わたる空

郭公稀

あかすのみかたらひもせむほととぎす など一こゑに又かへる覽

江五月雨

くるとあくとはれまはみえぬ五月雨に あしの若葉もこもり江の水

夏夜月

見るかうちに雲かくれせし月影の あまり程なくあくるみしか夜

叢間蚩

しけりあふ草の葉ことに乱ゆく 露やいつれととふほたる哉 桂

村夕立

雲風のよそにみてしも杉むらの 梢をわけし夕立の空

杜蟬

うちしきり朝夕さらすなく蟬や もりこそ夏の陰をしたひて

夕納涼

涼しさの夕をまたやおもひをく 木かくれおほき山のした道

初秋風

露はまつもろくも落て桐の葉に しられぬ秋のかせをみせける

七夕契

たなはたのたへぬあふ瀬もいつの世より くる秋ことに契をきけむ

庭萩

とはれむのたよりもしらぬ軒はにも 人のをととしてそよく萩原

野萩

いほりさす野への萩はら朝夕を われもしるとそなれてすみける

原薄

かよひちも露の玉ぬくいとすきき あしたのはらはいかゝわくへき

浅茅露

袖かけて置わたす露の明くれそ 秋の物なるあさちふの宿

朝野分

野分せし今朝は千種の花ちりて つゆのはへなきまかきをそみる 槻

秋夕

秋よいかにたくひになしてわか心 草木にしほる露の夕くれ

虫声滋

きゝわたす夕はおなし草のもとに 鳴たつむしのあはれそふ声

雲外雁

月のこる雲はいつくの半天に さたかに見えて雁はきにけり

遠聞鹿

さをしかのこゑかすかなるくれことに すまはやおもふ秋の山さと 槻

待月

秋かせの雲吹はらふやまのはに いさよふ月をまつの戸のうち

見月

さはりなく月みる夜はや八重葎 さしこもる身の秋もわすれん 桂

惜月

出待しもいるさの山のなにしおふ 月のゆくゑやさらにしたはん 篠

曙山霧

うす霧はたちもとまらぬ秋かせの 山さたかにもあけほのゝ空

里擣衣

そことしもさとをはわかすから衣 うつ音すめる秋のねさめに 篠

菊久盛

さきそめし秋より後もなれてみは いくゆふ露そ庭のしら菊

紅葉浅

露もまた心のかきりそめあへぬ 山はおくあるもみちをそみる 桂

紅葉脆

やま風をいかにうらみんそめそめぬ 紅葉ももろき木々の下露

暮秋

露は袖にはらはてをみむ行秋の かたみとてこそ思ひをくらん

寝覚時雨

過かてのねさめの空の初しくれ きゝし物ともさためかねぬる

寒草

あはれ見し色の千種の霜かれに のこるはかりの野へのさゝ原

夕霰

篠の葉の太山はさそな夕あらし 吹いつる空にふる霰かな 桂

松雪

うちはらふ雪よりうつにあらはるゝ 松はみとりのふりぬ色かな 桂

竹雪

ふる雪にけふの日も又くれ竹の よのうきふしを人のとへかし

河上氷

にほ鳥のかよはん道も冬川の うへは氷に思ひわふらむ 桂

冬暁月

おき出たれかみるらむあかつきの 霜にさえ行月のひかりを 槻

湊千鳥

ことゝふやわか友千とり波間なき 袖のみなどのよるのまくらを

夜埋火

冬ふかきたのみ所もうつみ火に ありとはかりの夜さむをそしる

歳暮

くれて行しるへもなきをなれきつる ならひにしたふ歳の名残そ

寄月恋

こぬ人の面影さそふ月をしも なみたのひまにいつかみてまし

寄風恋

いかにせむ風をたよりにかきやりし わかことのはのよそにちりなは

寄雲恋

さすかまたみすやよそにもあま雲の きへかへりてもまよふ心を

寄雨恋

うき度に涙の雨のしくれては 袖におもひの色やまさらん

寄暁恋

わけなれぬあか月露のみちしはに 思ひやきえむゆくそらもなし 桂

寄夕恋

とはるへき契もあらはとはかりの 夕をよそにけふもすくしつ

寄夜恋

ちきりをきしそのかねことをたのむにそ 千よも一夜にそふ心ちする

寄山恋

言よらむたよりもなしやこゝろのみ つくはの山のしけきさはりに

寄野恋

草の名にかこちやよらむむさし野と いへははてなき露のみたれを 桂

寄河恋

岩かねにせきかへさるゝおもひをは いかてもらさむ山川の水

寄浦恋

しほやかぬ志賀のうらみも今はたゝ みるめなきにや思ひわふらん

寄木恋

恋すてふ名のみもかくてむもれ木の くちはてん世をあはれともかな

寄草恋

花すゝきほに出てとはしら露の むすひをきつる契成ける

寄鳥恋

思ひねの枕にとをき鳥の音を いつ衣／＼の空にきかまし 篠

寄虫恋

しのふにもたへぬ思ひを音にたてゝ 身のたくひとや虫も鳴らん

寄衣恋

思ふにもつらき心にうつせみの うすき衣のへたてなるらむ

寄枕恋

夢にてもあふ瀬あるやとねぬる夜の まくらにつらき有明のかけ

寄書恋

人つてのこたへをそ思ふ水くきの かきやりし名はよしやたつとも

寄鐘恋

鐘のこゑわかれもよほす手枕に なみたせきあへすおき出る空

寄舟恋

あちきなく君を思ひもおきつ舟 よるへありとはたれにとはまし

暁山

すむ人のねさめをそおもふ山かつら うき世をよそにかけはなれても

夕野

夕まくれねくらの鳥も人かへる 末野の風にこゑたてつ也

夜雨

竹になる夜半のあらしの程もなく 窓うつ雨の声しきりなり 桂

窓燈

吹風に螢やいつち窓のまへに ほかけはかりそきえむともせぬ

庭苔

しめやかに雨ふる庭の苔むしろ なをしきたへの露そみたるゝ

江葦

舟うけてあそふ入江のあまの子は よしあしをさていかゝわくへき

浦松

しほかせに浦なれてしもいく春か いくとし波のこゆる松はら

山家雲

山水のたよりにすめる身にしあれと 都の雲のへたてすもかな

山家嵐

山ふかくなれすはいかにまさきちる みねのあらしに身をもくたかん

田家鳥

鷺のゐる門田の早苗末とをく はれたる水の影の涼しさ

閑居

たへてしもすめる陰かな鳴鳥の こゑきかぬ山のおくのさひしさ

故郷草

ふるさとのまかきは草にうつもれて わくる跡なき道芝の露 槻

旅行

しるしらす道行ふりの旅の空 かたらふ袖は露そこほるゝ

旅宿

おなし友おなしやとりをたのむへき　ゆくゑさためぬ旅のかなしき

旅泊

たひはたゝおなし泊もあかしかた　月のよ比のうきねをそ思ふ

述懐

たかうへも万の事はひとつ身に　やすからぬ世を思ひとやせむ

往事夢

年波のこえ行あとを思ふにも　うき世の夢もかへるともなき

神祇

いのりをくしるしをみはや光ある　世のこと葉の玉つしま姫

尺教

〔こと葉の玉つしま姫、おほく其類満耳候敷〕

あさからぬ法のえにしも広沢の　池のこゝろはくみもしらはや

祝言

末とをくあふけはたかし貴君の　うこきなき世をしたつ岩ねに

僻点十九首

桂予　十首

篠三条大納言　五首

槻基朝規臣　四首

【略解題】

まず書誌を記す。

伏見宮家統百首和歌（大永三年五月）（図書寮文庫蔵資料目録・画像

公開システムにおける書名、以下同）　貞敦親王御詠　三条公頼・持

明院基規詠、三条西実隆合点添削。貞敦親王御筆。伏見宮本。一軸。

〔函架番号〕伏一二五。〔装訂〕卷子装。〔法量〕天地二一・三cm。〔表

紙〕浅紫色無地の絹地（宮内庁書陵部による後補）。二二・三cm×二

一・五cm。〔外題〕伏見宮家統百首和歌　大永三年五月（後・左・簽

・書）。〔内題〕続百首和歌。「本文」和歌一首二行書。歌題二字下げ。

〔紙数・法量〕第一紙縦二二・三cm×横二七・四cm（以下横　寸法

のみ記載）、第二紙縦二七・六cm、第三紙縦二八・二cm、第四紙縦二

八・〇cm、第五紙縦二八・九cm、第六紙縦二八・〇cm、第七紙縦二八

・二cm、第八紙縦二八・〇cm、第九紙縦二八・一cm、第一〇紙縦二八

・〇cm、第一一紙縦二九・三cm、第一二紙縦二八・〇cm、第一三紙縦

二七・九cm。第一四紙縦二七・八cm。第一五紙縦二七・九cm、第一六

紙縦二八・八cm、第一七紙縦二七・七cm、第一八紙縦二七・九cm、

第一九紙縦二七・六cm、第二〇紙縦二七・九cm、第二一紙縦二七・七

cm、第二二紙縦二七・〇cm、以上全長六m二　八六cm。第二三紙とし

て一七・七cmの後補白紙を軸に繋ぐ。〔料紙〕楮紙。〔蔵書印〕巻　頭

に「図書／寮印」（方形朱印、単郭、陽刻）あり。〔書写者、書写年代〕

貞敦親王筆。室町後期。〔備考〕合点。末尾に作者次第。端裏書に「逍

遙院点秋脉三眸」と墨書さる。

書陵部蔵伏見宮本『後崇光院御詠』（伏一八一）に江戸写の転写本が

収められている。作者表記及び作者次第の「桂」は貞敦親王。「篠」は前

掲「図書寮文庫蔵資料目録・画像公開システム」は三条公頼と解釈してい

るようであるが、井上宗雄『中世歌壇史の研究　室町後期』（明治書院、

一九七二初版、一九九一改訂新版）は「公条？　公頼？後者か」とある。

「槻」は持明院基規。『新編私家集大成』『貞敦親王』解題に、親王の歌を

一〇首含む資料として紹介されている。

（酒井茂幸）

5 三十三首釈教和歌

〔宮内庁書陵部図書寮文庫蔵伏見宮本（伏一五三三）〕

三十三首釈教和歌（外題〔題簽〕）

法会因由

あしからしよしやとはかり法にあひて なにか難波のえにしなからむ

善現起請

にこる世のまよひも法のをしへには こゝろの水のすめるとをしれ 房通

大乘正宗

心もていきとしいける身をうけは やかてつねなき世とはしられん 晴良

妙行無住

行水のとまりやいつこしら波の たつるなき身はかくれかもなし 兼冬

如理実見

こゝろより誠の法を見ぬひとや 夢もうつゝもおなし世の中 尹豊

正信希有

心たゝあとなき浪のなみにして 筏の床をはらふ川かせ 公朝

無得無説

われのみに待えさりせはたかりに きくともいはし山ほとゝきす 光康

依法出生

玉くしけみなこれよりの言の葉に ひちきて見する法のことはり 孝親

一相無相

一色にそまぬ心やをのつから まことの法のえにしなるらん 永家

莊嚴浄土

やとりとはさためすなから吹よりて 松の外なる山かせもなし 言継

無為福勝

うけてしも真砂の玉の光ある つゆのめくみそ人にあまねき 季遠

尊重正教

影とめし月はそれともせきあへぬ つゆこそもとのやとり成けれ 惟房

如法受持

名をきくにかしこき法のありなしは をろかなる身に思ひわかめや 基規

離相寂滅

この岸をはなれ出てはあま小舟 いつくうらみのなにかのこらむ 宣忠

持経功德

てをおりて十といひつゝたとへをく のりのまことにあふかうれしき 国光

能浄業障

雲霧とかさなる罪もきえ行や 大空きよき月のさ夜かせ 雅業

究竟無我

われもなく人もなき世とむかふより むなしき空に月のすむらむ 為康

一牀同観

三の世に身をつくしてもあひかたき 法のまことはいかにもとめむ 長雅

法界通化

山水のひろき心はかけつくも しらぬかけひのすゑにみすらん 重保

離色離相

さくとみしはなのこすゑは嵐ふく 雲のしるへのそことしもなき 基孝

非説所説

春かせの花の下ひも時しありて をのつからなる法とたにしれ 公古

無法可得

花にさきもみちにそむる梢にも なをとゝめえぬ春秋のそら 源為仲

浄心行善

人わたすはのりの舟にさほさして きよきなかれのすゑも尋ねむ 栄空

福智無比

とりてみよこゝろの玉の光には 百か一もたくひあらめや 秀房

化無所化

人わたす名はくちなから橋もりの 往来たえせぬ道をなしけん 仍覚

法身非相

おもへともいかにこゝろは花鳥の 色にも音にもまつうつらん 公彦

無断無滅

めくりあふけふのさ月の一こゑに 又つきて聞やまほとゝきす 公頼

不受不貧

よしあしに朝のつねの身をしれは なにをむさほるえにしとかせむ 諦空

威儀寂静

世とゝもにありてなき身と白雲の たちゐなりける朝夕の空 応胤

一合相理

なへて世の塵をはなれは春秋の はなもみちもいかにとかみむ 任助

知見不生

ねにかへり木すゑに咲とみし花の おなし色香やあはれ世中 邦輔

応化非真

こゝに消かしこにうかふ水の泡の 行めくるけふも又夢のうち 澄一

朝露のはなをやとりにさためをく こてふのゆめに春かせの空 澄一

【略解題】

本書の書誌は以下の通り。

三十三首釈教和歌 貞敦親王（歟）以下計三二名の歌人出詠（詳細後述）。伏見宮本。一軸。「函架番号」伏一五三三。「装訂」卷子装。「法量」天地二八・二cm。「表紙」紫無地の絹布。「外題」三十三首釈教和歌（後・左・簽・書）。「内題」なし。「本文」和歌一首二行書。歌題二字下げ。「紙数・法量」第一紙縦二八・二×横四五・八cm（以下横寸法のみ記載）、第二紙縦四六・六cm、第三紙縦四六・四cm、第四紙縦四六・八cm、第五紙縦四六cm。以上、全長二m三一・八cm。第六紙として、二八・六cmの後補白紙を軸に継ぐ。「料紙」楮紙。「蔵書印」巻頭に「図書／寮印」（方朱印、単郭、陽刻）一顆あり。「書写者、書写年代」室町末期写。「備考」末尾に作者次第あり。合点のかけられた歌のみ作者名を記す。端裏書に「破損」元十一晦日」と墨書さる。本書には、年時に関する記載が一切なく、そのためか、井上「室町後期歌書伝本書目稿」にも触れるところがない。また管見の限りでは、他に伝本はない。あるいは原本か。

出詠歌人は以下の通り。貞敦親王（歟、無記名歌、親王ノ三子ガ出詠シテキル事カラノ推定）・「一条」房通・「二条」晴良・「一条」兼冬・「勸修寺」尹豊・「西園寺」公朝・「烏丸」光康・「中山」孝親・「高倉」永家・「山科」言継・「四辻」季遠・「万里小路」惟房・「持明院」基規・「中御門」宣忠・「広橋」国光・「白川」雅業〔王〕・「五条」為康・「高辻」長雅・「庭田」重保・「持明院」基孝・「滋野井」公古・源〔五辻〕為仲・栄空（未勘）・「万里小路」秀房・仍覚〔三条西公条〕・「今出川」公彦・「三条」公頼・諦空〔三条実香〕・応胤（法親王、梶井門跡、貞敦

親王第五子）・任助（親王、貞敦親王第四子）・邦輔（親王、貞敦親王第四子）・澄一（未勘）。

本歌会の時期をこれらの出詠歌人の事蹟から絞り込んでみる。まづ、兼冬は、天文二三年（一五五四）二月一日に死去してゐるので、それ以前。三条西公条の落飾は天文一三年（一五四四）二月二七日であるから、それ以後。この十年間であるならば、出詠歌人に矛盾は生じない（在国等の条件を加味すればなほ絞り込めるとは思ふが）。

歌題の「法会因由」以下は、『経旨和歌』（新編国歌大観・第一〇卷所収）の三番歌から三四番歌までに配列を含めて一致する。歌題の典拠となつたかとは推されるが、『経旨和歌』の伝本が続群書類従本以外存しないので、断定は憚られる。

（武井和人）

⑥ 伏見宮家百首和歌 冬恋雜

〔宮内庁書陵部図書寮文庫蔵伏見宮本（伏一五四五）〕

伏見宮家百首和歌冬恋雜（外題）〔題簽〕

「第二紙端裏に「西三条公条公」包紙（明治）に／「西三条公条公和哥点」とあり。（現在では見当らず）」（前表紙見返し左上貼付小紙片）

杉路霜深

すきの葉もしらゆふかけてをく霜に かよふあとあるみはの山もと
かけふかき道のあさ霜さへ／＼□ 杉のはしのく山かせそ吹
日の影ももり来ぬすきのした道は きえあへぬ霜の□□
山かけの道とみなからをく霜に 杉のはしたりえこそはらはね
松すきのみちの山かせ袖さむし あさをく霜もあとみえぬまで

橋下水

ゆく水の音た□ □る日を ふるのたかはし人もかよはず
冬河のまへの板はしゆく駒の をとはこほりをくたく声哉
淵にのそみこれや氷をふむならし
くちのこりたる谷のいたはし

音声重量
無證きこえ
候哉

ゆく／＼もあやうきはしのうへよりは ふみ見まほしき朝□
はし姫のかたしく袖もさゆる夜や 氷をわたるうちの川かせ 長淳

江上千鳥

江をとをみよせくる浪の友千鳥 ひくしほかせにつれて立みゆ
ふゆふかきふる江の小菅かれのこる かけに千とりもこゑうらむ也
うらかせは入江のあしに吹すてゝ しほひのあとにちとりたつ声

江をとをみつまをこふとかさ夜千鳥 あかつきかけてこゑの聞ゆる

いくたひか行てはきぬる友ちとり 浪の入江にいさなはれつゝ 長淳

泊冬月

冬の夜もあかしの泊月みれば さむしとむかふうらかせもなし
波まくらぬるゝか□へにさゆる夜の 月のこほりの影もさやけし
かち枕かたしくそてもさえ／＼て 月の氷にかゝる浦波
うちわひてわれやあかしのよるの浪 こほれる月を枕なからに
さえわひぬうきねも心からとまり 月もこほれるなみの枕に

冬夜難曙

霜さむきゆふつけ鳥のおきもせず ねもせぬ空をあかしかねつゝ
冬の夜はいく寝覚してをく霜の みちてか空のあけんとすらん
あくるかとみるに夜ふかき閨の上や 霜よりしらむ板間なるらむ 長淳
鐘の声まくらの霜にさえわひて ねられぬ老の冬の夜なかさ 上
しもまよふ床のさむしろしきわひて あげやらぬ夜を空に待つゝ 前左衛門督

閑窓霰

竹の葉にさやくもかせのそれながら あられ音するまとのさひしさ
竹のはも窓うつ夜の玉あられ さやけきこゑを光にそきく
（一首闕歎〔略解題参照〕）

窓こしの音もさなからさ夜ふかき まくらのうへにふるあられ哉

おどろけとあられ音する山まとは うき世の夢もいかゝのこらむ

山まときゝよからすや

暮村雪

袖のうへの雪うちはらふその間にも みちたと／＼しくるゝ一むら
暮にけりわかすむさとの一むらも まとふはかりの雪ふかくして 源宰相中将
人かへるたかゝよひ路もさたかにて ゆふ辺をわかぬ雪の山もと

雲かへり鳥もねくらやもとむらむ 雪にむもるゝをちの一村
軒の松戸はその竹のひとむらも ゆきにはくれぬやまもとの里 長淳

雪中述懐

雪になをおもふもかなしくらゐる山 ふもとなる身はのほる道なき
代とのあとに残るはかりの身はふりぬ いまはきえなんゆきかくれはや
都にていまみる雪よしの山 おもひ入へきともはありとも
雪のうちをとひくる人に宿からの 庭のをしへのあとやみゆらん
あつめても中／＼雪のかひもあらし ふりゆく年のひかりなき身は 源宰相中将

軒早梅

あしかきのまちかき春のとなりとや 軒はの梅も香にゝほふらむ 長淳
軒ちかくにほふにしろしむめかえに ふりをける雪の冬木なからも
鶯もきつゝなかなんはるまたて まつさく庭の梅の立えに 前左衛門督
冬ふかき両下の軒端にさく梅も 春のかたえや色をそふらん 上
いまいくかありて春へと花にみむ 冬こもりたるやとの梅か枝

老後歳暮

おもふにもさそなくなるしき老か身に くれはてゝゆく年の余波は
(一首闕敷〔略解題参照〕)
はるをまつ心の馬もいさまれす つかふるさかひすくる我身は
老か身にいかはかりなる名残そと しらぬそこの世年そ暮行
いそかれし春はむかしの年の暮と たれ老らくの身にしたふらん 長淳

久忍恋

なにと又しのひでの世を過すらん いはては人もかけしなさを
もえいてし軒のしのふのかことをや なを身を秋の露にかけまし
としへぬるこゝろのおくのみたれゆへ 袖に涙をしのふもちすり

終はたゝよはりもそするしられしと いくそし月にたへし心も 源宰相中将
今さらにしのお心よよはるなと おもふ月日もいくとせの空 長淳

見書増恋

袖のほかにもらさしとみし水茎の あとやおもひの淵と成らん
つゆはかりかくことの葉もみる度の おもひのかすの色をそへつゝ
見るにいまなさけもなけの筆の跡に なにをおもひの涙おつらむ
つれなさのこゝろこと葉ゝ水くきの 跡にもみえてそふ思ひかな 長淳
情たゝうはへはかりのひと筆に 物うたかひのそふおもひ哉

遇夢恋

恋草はよしかれぬともたねしあらは 見るよあるへきうたゝねの夢
ちきりあれは夢のたゝちをしるへにて うつゝに人をあふ夜ともかな
又やねんおなし枕の夢はたゝ あたになさしの逢夜成せは
逢ことのありしやいつのよすかとして 夢には人にかはすた枕 上
思ひねのうつゝのうさを逢とみし 夢の中にもかこちつる哉 長淳

難忘恋

夕くれはわすれん物か雲風の こゝろさはかす空ならずとも 源宰相中将
あともなく人はなすとも忘なと いひしをたのむ我身とをしれ 長淳
花のもと月のとほそもおもひ出る ひとに恋しきゆくゑならずや
すゑつゝに絶ははつともおり／＼の なさけを人にえやは忘れん 上
わすれ。んとおもふ心のあやにくに なをおもかけのそはぬ日もなし 前左衛門督

人伝恨恋

身にしらはわかことはりを人に又 かゝるうらみといひもつたへよ
猶さりにつたへやするとおもふにも いさやひとにもそふうらみかな 御詠
なをさりの中にことばる言のはも なくさめかたきうらみとをしれ

おほつかないひはるけすはななたちも おなしこゝろのうらみとやなる
つゐにそのうらみところやあたならん つたへし人もうしろめたくは

海辺曉雲

雲うかふ興津小しまの波のうへに あかつきかけてたつそなくなる 御詠

海松のみる色そへてあけほのよこ雲かゝるあまのはしたて

山かつら峯に一すちまつひきて なみよりしらむいその松はら

くもかゝる向後をみれば有明の 月そきえ行沖津しら波

うなはらやよこ雲しらむ山のはを こゝろあてにもいつるとも舟 ゆくゑ せえ行 猶 むつか しくか 候敷 長淳

鐘声何方

明方の霧に声もやへたつらん 野寺のかねのそことしもなき

雲にとちあらしのたゞく柴のとに いつくのかねそわく方もなし

かねのこゑ空にそまよふ雲うつむ ゆふへのてらは山をへたてゝ 源宰相中将

つく／＼となかめし空はそことなき かねの声にもくるゝさひしき 長淳

山かせや吹をくるらんをちこちに きこえてかはる鐘のこゑ哉

樵笛幽

里とをくかへる木こりのふく笛や かせをたよりに声聞ゆらん

ひとや薪の道にやすむらん あらしの末に笛の音そする

柴人の雲をとゝむる笛の音に 山ちはるかに暮わたるそら

きほひきてかすかなる音も山風の きこりの笛や吹かへすらむ

夕くれはかへる木こりの笛の音も 物のさひしき山かせそふく

懐旧涙

袖のうへにふるき涙の水からも わかおもひ出のうきや忘れぬ

思ひいつるこゝろにかへるむかしには なんとなくさまぬ涙なるらん 長淳

おとろけは涙なりけり身のむかし めにもさやかにみるはかりにて 御詠
おもふとてかすかくはかり行水の はやくの事に袖ぬらすらん
はかなしやむかしかたりのあはれ身を ことほるまゝにおつるなみたは

寄神祝言

春に猶色そへてみむ誰をかも しるとかあふくすみよしの松

いのりをくひとつねかひは我君の 御代をまもりの神のまに／＼

跡たれし神の廬よみつかきの 久しかるへき世をおもふとて

まもれなをとをき神代のよはひをも いま我君のありかすにして

かしこしな七代五代の神代より うけつくひつき君かまに／＼ 前左衛門督

僻案愚点廿九首

御詠 三首

上 四首

前左衛門督 四首

源宰相中将 五首

長淳 十三首

【略解題】

本書の書誌は以下の通り。

伏見宮家百首和歌 伏見宮本。一軸。「函架番号」伏一五四五。「装訂」

卷子装。「法量」天地二九・七cm。「表紙」浅紫無地の絹布。「外題」

伏見宮家百首和歌(巻末) (後・左・簽・書)。「内題」ナシ「本文」

和歌一首二行書。歌題二字下げ。「紙数・法量」第一紙縦二七・九

×横二八・九cm (以下横寸法のみ記載)、第二紙縦四五・六cm、第三

紙縦四四・四cm、第四紙縦四三cm、第五紙縦五・二cm (後補白紙)、

第六紙縦四三・二cm、第七紙縦四一・二cm、第八紙縦五cm (後補白紙)、

第九紙縦四三・四cm、第十紙縦四六・二cm、第十一紙縦四六cm、第十

二紙縦四六・三cm、第十三紙縦四六・二cm、第十四紙縦四六・三cm、

第十五紙縦三一cm (後補白紙)、以上、全長五m六一cmあまり。「料紙」

斐紙 (鳥の子紙) 「蔵書印」巻頭に「図書／寮印」(方朱印、単郭、陽

刻)一顆あり。「書写者、書写年代」室町後期写。「備考」見返しに「第

二紙端裏に「西三条公條公」包紙(明治)に「西三条公條公和哥百

首」とあり。(現在は見当らず)」と記した、小紙片を貼付。和歌右肩

への合点及び本文への書き入れ(評語注記)などは、巻末に「僻案愚

点廿九首」と記す人物によるもので、三条西公条のものか、本文とは

別筆であろう。また、作者名については合点が付された和歌にのみ見

られ、匿名で合点・評語を依頼し、その後に作者を顕し記したものと

思われる。

○

【緒言】にも略記したように、本歌会は、『新編私家集大成』に収めら

○、正徳六年写)に見え、『新編私家集大成』解題で指摘がある如く、『貞
敦親王御詠』の原本と位置付けられるものである。『新編私家集大成』の
歌番号で示せば、貞敦親王・七九八〜八九五に相当する。

「杉路霜深」以下計廿題、御詠・上・前左衛門督・源宰相中将〔中院通
為?〕・「東坊城?」長淳の五名の詠による百首。ただし、書誌にも記し

たように、二紙、巾の狭い白紙が継ぎ足されていて、その部分、各一首(計
二首)、歌が闕けていると見做される(新編私家集大成も同様に闕く)。即
ち、

第四紙・末尾 (閑窓霰) 「竹のはも」歌(八二四)

第五紙(白紙、五・二cm) ……一首闕脱敷

第六紙・冒頭 (同) 「窓こしの」歌(八二五)

*

第七紙・末尾 (老後歳暮) 「おもふにも」歌(八四二)

第八紙(白紙、五cm) ……一首闕脱敷

第九紙・冒頭 (同) 「はるをまつ」歌(八四三)

となっている。合点がかけられている歌数と、末尾作者付における歌数が
一致するので、闕脱しているうたに合点はかけられていなかったようであ
る。

(釈文Ⅱ石澤一志、略解題Ⅱ石澤一志・武井和人)

〔宮内庁書陵部図書寮文庫蔵伏見宮本（伏一五七九）〕

点取和歌伏見殿（外題〔題簽〕）

暁雪

ふる雪もしらけたる夜や暁の とりもそらねに鳴かはすらむ

相坂の杉はむもれてやまかつら かけのたれおの雪はらふらん

人しれすつもりし雪の梢より また夜ふかくも鳥やなくらむ

鳥かねのきこゆる空は天の戸も はやくや明し雪のひかりに

かねの声とりのなく音もうつもれて 雪ふかゝれやあかつきのそら

／ふる雪を空にまかへてあけぬとや またきに鳥のはつ音なくらん 長雅朝臣

ねやのうちに聞もさなからあかつきの 枕ふりうつむ雪の音かな

まきれなく聞そ寒けき風ませに 雪の窓うつあかつきのこゑ

／かけやいまふらぬかうへにつもるらむ 有明の月の嶺のしら雪 御

いかはかりつもるとか見むあり明の ひかりそひたる庭のしら雪

おき出てゆく／＼跡や有明の 月におとろく雪のした道

霜の色にまかへん物かありあけの 雪の名残のうす雪の空

した氷る床のふすまのうす雪も なをあかつきやかさねわふらむ

／ふかきよの雪よりいつる鐘の音や 枕にちかくさえまさるらむ 公範

朝雪

／いつくをかくまとも見まし野も山も なきたるあさの雪のうへ哉 桂

朝な／＼かせのやとりやしら雪の つもりもあへぬ庭の松か枝

あさ戸明てすたれをまけは四方も猶 みる／＼ちかき山のはのゆき

朝日さす影にうつろふ花なれや なへて野山の木とのしら雪

あさ日かけ又かきくもりふる雪に 遠かた人や道まよふらむ

〔下句新後拾遺法印浄弁卯花のかきねはかりの夕月夜遠かた人の道や

まよはん／相似候敷〕

とへやけさまた初雪の消やらぬ 跡たに人におしみやはせむ

とはるへきたよりもしらて松の戸は あくるもやすき峯のしら雪

／とはれすは誰をうらみんわか宿に ちきりもをかぬけさのしら雪 隆重朝臣

雪ははやけさふりうつむ庭の面の こほらぬ程をとふ人もかな

鳥の音もうつもれはてゝ柴の戸は 雪にあけやらぬ今朝の空哉

／けしきはむつま屋の梅もふる雪に もてはやされてあくる色かな 三

／おなしくはふるをも見はや夜の程に はれたる庭のけさのうす雪 今出川大納言

／九重やつかふる道のたえぬ世も あとある雪のあしたにそみる 長雅朝臣

／心ある人にはつけよ朝ほらけ つりする舟の雪のうらなみ 源中納言

夕雪

さやかに松の葉ぬるゝ夕日影 つもらぬ雪やみそれなるらん

残りつる入日のかけはきえなから ゆふへを余所の雪の松か枝

暮わたる夕をのこす雪の中に あらしそさそふいりあひの鐘

／夕まくれふるかとみしや三日月の かけもそれなる庭のはつ雪

／夕月夜又うす雪の木の間にや こゝろつくしの影をそふらむ 公範

／暮ゆけは夕ある雲もそのまゝに 雪にたなひく遠かたの山 若

／いつとなき色ともみえず夕月夜 さすや岡へのまつのしら雪 今出川大納言

ふみ分てとひくる人の夕つく日 さしもえならぬ庭のしら雪

宿もかなゆふ狩をのゝかへるさに ゆきを吹まく袖の山かせ

／真木の戸もさゝてみよとやしはし猶 雪の光のくれ残るらむ 源中納言

木かくれの夕さむけくふりすさむ ゆきをねくらの鳥の一こゑ

飛鳥のあすかの里のねくらをや ゆきにたとらむ夕くれの空

ふる雪にそれともみえずねくらとふ 夕山からす声はかりして
つもりては名たゝる松のあらしたに 音なき雪の暮のしつけさ

夜雪

ふるほとのおほつかなさもうは玉の よの間の雪はあけてこそみめ
をのつからよるひかりある玉とみて やみにもしるき庭のしら雪 御
木からしも積りし後は吹たえて しつけきよはの雪おれの声

呉竹のよのまにつもるしら雪を みよとやつくる下おれのこゑ 言継朝臣

吹しほる竹のさ枝の風の音も 夜ふかき雪や降うつむらん
はらはすはむもれいたしや篠の屋の 一夜はかりの雪にたへても
よるとなきみかきの雪の光にや 衛士のたく火も消てみゆらん
埋火のきえすはと思ふ夜とゝもの ゆきのひかりそ我いのちなる

〔世とゝもを夜二用る事／有は尤／事候敷〕

さよ風はしつまる窓に音するも それかと雪をみる敷きく心ちして 源中納言

夜もすから月の光もふる雪も さやかにみゆる庭の面かな

／＼てる月の影もひかりもうすくこく つもりわけたる庭のしら雪 三

／＼かけながらふりくる雪はさゆるよの 月よりちらす光とやみむ 今出川大納言

あけぬまのふかさあさゝもいかならん はれやらぬ雪の里のかよひ路

山雪

山さむみあらしや袖にまきもくの ひはらさひしき雪の色かな

玉すたれあかす見ゆやとまきもくの ひはらの雪の山もさたかに

ちりぬちの山となりしをおもふにも 雪のつもるはかきりこそあれ

／＼みし春のはなもよはし松杉も 雪にましらぬみよし野の山 桂

わすられぬ春と秋のおもかけも 雪のうへなるみよし野の山

／＼山とりのおのへは雪にうつもれて はるみし花の色そへたてぬ 三

あさあらしたゝく北窓おしあけて むかへは雪のこしのしら山

／＼ふもとなる吾立袖の小野のさと 雪ふみわけていまもとほなむ 妙

小野山の雪にまかはすすみかまの けふりや空に立のほるらむ

大ひえやをひえの山の名もたかく みやこの富士の雪をなかめて

はらひあへぬ雪やさなから水鳥の 音はのやまにかゝるしら浪

明わたる嶺こえて行かさゝきの つはさにふれる雪やみゆらむ

／＼晴そむる雲間さたかに遠かたの やまより雪はあらはれにけり 隆重朝臣

／＼このまゝに降やつゝかむ今朝の間は 高ねはかりの雪のとをやま 今出川大納言

都雪

四方にちる花とや見まし鳥かなく せきのこなたの雪の明ほの

／＼なかめては都にのみとおもふかな おなし千里の雪の明ほの 今出川大納言

／＼小車のひきすてしあとか下の帯の みちをみやこの雪のあけほの 桂

見わたせは一色香にふる雪の 柳さくらは春のにしき木

／＼さきいてし花の都のおもかけを ちらさてにほへ木とのしら雪 源中納言

とはれとふなさけの色も都ゆく 人のこゝろの道野への雪

おもひやるさそなこし路の旅の空 かゝる都の雪をみるにも

まとのひまむかへる人のたよりに 都の雪はたゝにやはみる

心ある人のすまぬはみやこにも わきてや雪のふかくみゆらむ

たれか又むくら。宿もみやこそと なくさめかねて雪をみるらむ

／＼わきてみよおなし都の家／＼に 雲井にちかき雪の明ほの 公範

ところからこゝは都の玉のちり 玉のみきりにみかきなすらん

／＼山さとはめつらしけなくふる雪も 都やはなの名にもたつらむ 若

春ちかみ梅さき出たかやとの ゆきをも花のみやこなるらむ

恋天象

大そらもきはめはあらむたとへても　むねにみちぬるおもひもそうき
／＼さそはれてうはの空にもなるものは　たかたくれのこゝろなるらむ　妙

それとなく物おもふ比は大空の　月にことはる涙もろなり
たれならぬ人のおもかけさそひきて　袖にや月のやとりとふらむ
恋しさの誰かは空におもひ出む　おなし雲井の月はめてゝも

／＼逢瀬あらはいのちのうちの一夜をも　かけてやまたむあまの川波　御

かさゝきやかかけしを思ふ契りさへ　身をうき中のはしと成けむ
かせの上にかへる雲の一すちも　わか中そらにめぐりあはゝや
うつり行こゝろもみえて浮雲の　そらたのめなる契りしもうし
おもふには袖そしほるゝあま雲の　余所にも人のへたて行身を
うき秋の涙になりぬ露しくれ　我身ひとつの袖をもとめて

／＼かひなしや月にといひし契りさへ　いく夜なみたの雨になすらむ　隆重朝臣

たのめつゝ待夜をおもふ音つれば　ありける物をむらさめの空

恋地儀

おもふにもうらみやふかき海山の　へたつる人の中のくるしさ

／＼しらせはや谷のむもれ木いたつらに　下ゆく水のたえぬこゝろを　隆重朝臣

色かへぬならひをなにとあさはかに　おもひ岡への松のうへの露

誰にいましかまのかち路ことゝひて　おもふ人にもあひそめてまし
隔てあるこゝろなりせは関もりの　うちぬるひまもかひやなからむ
たかさとしらぬ行ゑはまよふとも　いひしはかりの道やたつねん
あはれいまおもひふる江のみをつくし　つくすこゝろのしるしともみよ

／＼恋しなむいのちもけふかあすか川　なみたの淵に身はしつみつゝ　源中納言

袖のうへにたえすなかれて涙河　身には逢瀬のなとよとむらん

なかれてのあふせもしらす我袖に　おもふいもせの川はあれとも
よ^とゝもにたつ波かせも袖のうら　恨やふかく身をくたくらむ

ゆくすゑの人の契りはあら^かねの　つちとゝもにやおもひをかまし

／＼つれなさの人の心をおもふには　車をくたく道よりもうき　三

雑植物

さそふかたありともおなし水のうへは　身をうき草の跡もとめしを
かひなしやかくとはすれと和歌の浦に　玉もましらぬ浪のもくつは

〔慈照院贈太相閣下百首歌に、いたつらにかくもはかなし和歌のう

申候

をのつから人しとはねはわか宿も　蓬むくらのしけき庭かな

木からは吹もたゆまぬ冬の嶺に　ひとりつれなき松の色かな

／＼うつろはぬ色こそあらめふく風の　音もつれなき松のさひしさ　公範

いかて我しる人にせむ和歌のうら　まつのことのは風のすかたも

さはかりもたかつくりなす枝ならし　道なき峯の岩かねのまつ

峯とをきふもとの真柴ふくかせに　さとのけふり^はうちなひきつゝ

情をは春と秋とにわすられて　つねに岩木の陰にふるかな

／＼春秋のこゝろの色もそれならて　あはれ岩木の身はふりにける　御

春秋のかけにそたのむ花もみち　うつろふ色に身はまかせつゝ

みかきなす庭に葉かへぬ玉つはき　八千世のかけも君のみそみむ

のかれきてすなほなる世とたのむらん　竹をまかきのおくのやますみ

／＼君そ見むうへをく松の二葉より　木たかくならん千世の行末　若

雑動物

／＼いつれとは君やさためむつる^亀も　あらしはてぬ千世のかきりを　公範

和歌の浦に道まなつるの鳴声や 雲井におなし友したふらん

隆重朝臣 五首

あかつきは枕そはたて聞わひぬ なれもや老の友つるの声

言継朝臣 一首

／＼ひくしほの跡はるかにもすみのほる 月におしまぬあしたつの声 三条大納言

長雅朝臣 二首

君か代は浜の真砂になくたつの こゑは千とせの数やそふらむ

公範 六首

／＼入日さすみきはの木かけ雨晴て 鷺のある江の水のはるけさ 隆重朝臣

白妙の鹿よきゝすよいまもまた いつる時代にかはるへきかは

たかねこすあらしに落ちてむさゝひの 声する遠の里のさひしさ

しつかなるね覚にそきくつくかねの こゑをしるへに鳥やなくらむ

あはれにもかへりなれぬと暮行は 野かいし牛の家路もとめて

いつまてかなれもおもひの家の犬 さらにぬうき世につなかれもせむ

かけふかき山ならねともさひしさは ましらなくなる夕暮の声

かせさむみ巖かくれにゐる猿の 声は木の葉にうつもれそ行

おさまれる世に事とはむ桐のうへに すむてふ鳥のありやなしやも

僻案愚点四十一首

堯空

御詠 四首

桂 三首

妙 二首

若 三首

三 四首

三条大納言 一首

今出川大納言 五首

源中納言 五首

【略解題】

本書の書誌は以下の通り。

点取和歌（冬十題・伏見殿）（図書寮文庫所蔵資料目録・画像公開システムにおける書名、以下同） 邦高親王・貞敦親王御詠、今出川公彦・庭田重親等詠、堯空（三条西実隆）点。伏見宮本。一軸。「函架番号」伏一五七九。「装訂」卷子装。「法量」天地三一・五cm。「表紙」紫無地の絹布。「外題」点取和歌 俵財驪（後・左・簽・書）。「内題」ナシ。「本文」和歌一首二行書。歌題二字下げ。「紙数・法量」第一紙 縦三一・五×横四四・一cm（以下横寸法のみ記載）、第二紙 四六cm、第三紙 四六cm、第四紙 四七cm、第五紙 四六cm、第六紙 四六cm、第七紙 四六cm、第八紙 一四cm、第九紙 二九cm、第一〇紙 四三・五cm、第一一紙 四四・五cm、第一二紙 四六cm、第一三紙 四六cm、第一四紙 四六cm、第一五紙 四六cm、第一六紙 四六・五cm、第一七紙 四六cm。以上、全長七m二八・六cm。第一八紙として、一四cmの後補白紙を軸に継ぐ。「料紙」楮紙。「蔵書印」巻頭に「図書／寮印」（方朱印、単郭、陽刻）一顆あり。「書写者、書写年代」後述の如く、山科言継筆かと目される。室町末期写。「備考」堯空（実隆）識語及び合点、末尾に作者次第あり。合点のかけられた歌のみ作者名を記す。

○

本書の書写者について、「図書寮文庫所蔵資料目録・画像公開システム」では「貞敦親王御筆、三条西実隆自筆評語点」とする（後述する『新編私家集大成』解題においても）。その根拠の一端は、『新編私家集大成』第七卷・二五「貞敦親王」に詳しく述べられてゐる。即ち、『新編私家集大成』

「貞敦親王」は、底本に『中務卿貞敦親王御詠草』（伏一八〇）《瑤玉和歌集の内、邦永親王編、正徳六年藤原則光写、一冊》を採用してゐる。該書は、貞敦親王詠を集成しようとしたもので、事実、伏見宮本として撰集資料となつたであらう詠草類が多数残されてゐて、本歌会資料もその内の一つ。『中務卿貞敦親王御詠草』の歌番号でいふと、六五九〇七九七に相当する。このやうな事情があつて、本書が貞敦親王自身の自筆であらうと推定されて来たと覚しい。

しかしながらここに、この通説を否定する記述が見出された。

山科言継の自撰家集『拾翠愚草抄』（『新編私家集大成』所収、公益財団法人阪本龍門文庫に言継自筆本あり、孤本）に、本歌会に見える歌が十首存する（内一首は、言継の名前が記載されてゐるので「夜雪」題）、既知のものではあるが、『新編私家集大成』より当該部分を引いてみる。

同十日於伏見殿御張行 十四人 予清書 逍遙院点

暁雪

三八〇 鐘の声とりのなく音もうつもれて 雪ふかゝれや暁の空

朝雪

三八一 朝戸明てすたれをまけは四方も猶 みる／＼ちかき雪の山のはの雪

夕雪

三八二 ふみ分てとひくる人の夕つくひ さしもえならぬ庭のしら雪

夜雪

三八三 くれ竹のよのまにつもるしら雪を みよとやつくる下おれの声

山雪

三八四 大ひえやをひえの山の名もたかく 都のふしの雪をなかめて

都雪

三八五 所からこゝは都の玉のちり 玉のみきりにみかきなすらん

恋天象

三八六 うき秋の涙になりぬ露しくれ わか身ひとつの袖をもとめて

恋地象

三八七 色かへぬならひを何とあさはかに おもひ岡への松のうへの露

雑植物

三八八 をのつから人しとはねはわか宿も 蓬むくらのしけき庭かな

雑動物

三八九 陰ふかき山ならねともさひしきは ましらなくなる夕暮のこゑ

次に掲げるやうに、「夜雪」題の歌は、本書のそれと、本文・合点ともに一致する。

○点取和歌

呉竹のよのまにつもるしら雪をみよとやつくる下おれのこゑ 言継

○拾翠愚草抄

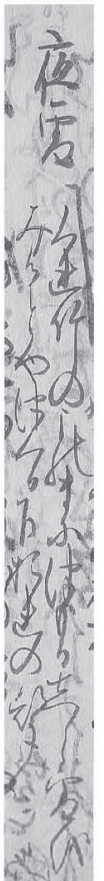
くれ竹のよのまにつもるしら雪をみよとやつくる下おれの声

他の九首も、本書に言継の名こそ見えないものの、歌そのものは本書に存し、『拾翠愚草抄』の資料的確かさが保証される。

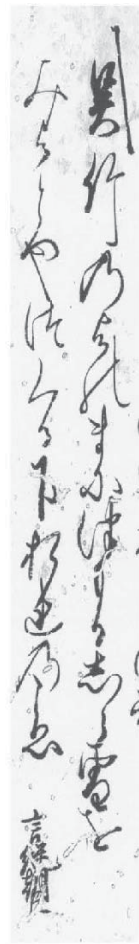
『拾翠愚草抄』の「同十日」とは、享祿四年（一五三一）十一月一日のことであり、これで、本歌会の年時が確定出来る（ただし、『言継卿記』に、この歌会の記事は何故か見えない）。

何より、「予（＝言継）清書」とあるので、ひとまづ本書の書写者が言継か否か、その検討がなされるべきであった。そこで、「夜雪」題歌の画像で比較検討してみよう。

○拾翠愚草抄 ※阪本龍門文庫善本電子画像集より



○点取和歌



例へば、「みよとや」「下おれ」あたりの運筆を比較すれば、同筆である

ことは明らか。従つて、本書を言継筆と断じ得る。

最後に。画像の転載を許可された、公益財団法人阪本龍門文庫・宮内庁書陵部に、あつくお礼申し上げる次第である。

（武井和人）